

修士論文概要

使い捨てプラスチック削減に有効な生活者視点のアプローチに関する考察 ～ドミニカ共和国における経験を中心に～

20MD0097 竹田 ゆきえ

研究の目的と方法

本論文の目的は、筆者が経験した使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクトの内容及び経過を分析することにより、生活者視点の有無が環境問題の解決に及ぼす影響を明らかにすることである。また、この生活者視点はソーシャルワーク専門職の活動における不可欠な視点のひとつでもある。このことから、上記の研究目的を果たすための分析の一部として、筆者が経験したドミニカ共和国における、使い捨てプラスチック削減プロジェクトへの筆者自身の介入プロセスを分析することにより、生活者視点を持つソーシャルワーカーのかかわりが、環境問題の解決にどのように影響を及ぼすかを明らかにするものである。環境問題は、世界中でその深刻さが明らかになっており、地球環境への悪影響が大きく、多く廃棄されている使い捨てプラスチックごみの削減は、世界共通の重要な課題の一つである。また、環境問題に関しては、開発途上国と先進工業国でその課題が異なるとの指摘や、開発途上国の人々は、先進工業国と比較して、環境問題による被害に脆弱な状況があるとの指摘もある。

筆者は、JICA 青年海外協力隊ボランティアとして関わった環境問題に関する啓発講座で、筆者らが伝える内容と、啓発講座の中で語られる、参加者の実際の生活場面との間に大きなギャップがあると感じる経験をした。これにより、環境問題の解決には、実際の生活場面を軸とする生活者視点が必要であり、その有無が何らかの影響を与えるのではないかと考えたが、派遣期間中に、プロジェクト自体を大きく変えることは叶わなかった。このことから、より適切なアプローチを探りたいと考え、本研究のテーマを設定した。

研究方法は、現地調査と文献調査を中心としている。現地調査では、筆者が JICA 青年海外協力隊ボランティアとして滞在したドミニカ共和国において、活動を通して得られた住民からの聞き取り及び参与観察の結果を取り扱う。また、文献調査では、環境問題の特徴やその状況を明らかにし、それを元に、現地調査で得られた情報を、生活者視点という観点によって分析する。

なお本研究は、環境問題により、いち住民が生活場面で直接的に影響を受ける事象や、住民自身の言動に焦点を当てて分析し、論じる立場をとっている。またソーシャルワークは、様々な知識や情報を把握し、活用しながら人々の生活という視点で課題を設定し、この課題に取り組む専門職であり、この視点が環境問題の解決に与える影響を明らかにすることで、ソーシャルワーカーが環境問題の解決に取り組む意義についても明らかにし、論じている。

目次

第1章 序論

- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 本研究の立脚点

第2章 使い捨てプラスチックゴミの実態

- 第1節 環境問題が世界の課題である背景
- 第2節 使い捨てプラスチックゴミの定義
- 第3節 使い捨てプラスチックゴミ問題の解決が困難である背景
- 第4節 先進国と開発途上国で異なる背景

第3章 ドミニカ共和国におけるゴミ問題の状況

- 第1節 ドミニカ共和国の概要
- 第2節 筆者の JICA ボランティアとしての活動
- 第3節 国内のごみ問題の状況
- 第4節 生活を通して見える状況

第4章 INAIPI で取り組んだ使い捨てプラスチック削減プロジェクト

- 第1節 INAIPI 概要
- 第2節 プロジェクトの経過
 - 第1項 環境問題と配属先活動との関連を共有
 - 第2項 プロジェクトの立ち上げ
 - 第3項 プロジェクトの具体的な活動
 - 第4項 啓発講座におけるステークホルダー（参加者）の反応
- 第3節 啓発の効果に関する考察

第5章 環境問題を生活者視点で分析する

- 第1節 隠された仮説の実態
 - 第1項 参加者は環境破壊の現状や保全の重要性について知っていた
 - 第2項 使い捨てプラスチックの具体的なイメージは共通ではなかった
 - 第3項 使い捨てプラスチック製品は必要に迫られて活用されることがある
- 第2節 生活者視点を用いたアプローチ
 - 第1項 生活上の課題と環境問題のつながりを捉えるプロセス
 - 第2項 プロジェクトメンバーを参集するプロセス

第6章 結論と今後の課題

- 第1節 結論
- 第2節 今後の課題

概要

本論文は、6章から構成されている。第1章では上記の通り、本研究の背景や目的、方法について述べている。また先行研究から、ソーシャルワーク専門職が環境問題に働きかけることが重要であることと、これまで積極的な働きかけがなされてこなかった状況が明らかとなった。そのため、本論文によって開発途上国の開発と環境問題解決を両立する新たなアプローチを示すことは、大いに意義のあるものと考えられる。

第2章では、環境問題が世界の重大な課題である背景、その中でも開発途上国特有の実態を明らかにしている。海洋プラスチックを例に見てみると、発生原因と被害が特定の地域で完結せず、国や地域の制限なく、広く原因と被害が生じている。それと同時に、発生原因となるプラスチック製品が世界中で一人ひとりの生活にまで深く用いられていることが分かる。特に世界中で広く、深く用いられているプラスチック製品の一つとして使い捨てプラスチックが挙げられる。食品や製品の持ち運びを便利にし、それらと分離したら不要となる、一度きりの使用を想定して生産された使い捨てプラスチックは、大量に生産消費され、自然界に容易に流出して悪影響を与えている。

また、1972年に採択された人間環境宣言では、開発途上国特有の環境問題の状況について以下のように言及されている。

“ 環境問題が開発途上国においては低開発と貧困から生ずるのに対して、先進工業国では環境問題が工業化と技術開発から生じている ”

第3章では、環境問題の実態として、地球規模の課題となっている背景や特に悪影響を及ぼしている使い捨てプラスチックの特徴を示している。また後半では、筆者が活動をおこなったドミニカ共和国内における環境問題の実態を、文献調査と筆者の観察調査から明らかにしている。環境問題が地球規模の重大な課題とされる背景として、特定の地域に限らず、広範囲にわたって原因と被害が相互に影響しあっていること、原因が世界中に広く、また、いち住民生活にまで深く入り込んでいること挙げられる。中でも、一度きりの使用を想定して作られる容器包装プラスチックは、繰り返し活用することを前提とした耐久性やデザインではなく、その多くが廃棄され環境悪化を招いている。

開発途上国において、先進工業国からの技術移転により、より高度な技術が入ってくるものの、適切な管理を実施することができないために、危険に晒される可能性も生じているのである。ドミニカ共和国においては、都市部を中心に人口増加によるごみ排出量の増加、人口密度の高い貧困地域における不適切なごみ処理の状況があり、自治体や民間事業者による取り組みが追いつかず、自然環境に悪影響を与えていることが分かった。

続く第4章では、筆者が立ち上げからかかわった使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクトの内容及び経過を示し、その活動の一部である啓発講座実施時に、隠された仮説が存在していたことを明らかにしている。

筆者は、JICA 青年海外協力隊ボランティアとして派遣されたドミニカ共和国乳幼児期総

合サービス局において、国内各地の貧困地域に設置されている乳幼児支援センターの支援の質を高めるため、首都の本部職員と共に多様な活動に従事した。その過程で、様々な生活課題とプラスチックごみ問題の関連を認識するようになり、共通の課題意識を持った同僚と共に、配属先内で使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクトを立ち上げ、活動を開始するに至った。本論文では、プロジェクト立ち上げ前の課題の認識や、同僚とのコミュニケーションの過程も含め、経過を示している。

なお、プロジェクト立ち上げ後は、配属先で排出されるごみの組成調査を実施し、その結果から、使い捨てプラスチックに焦点を当てることを再確認した。その後、配属先本部や、配属先が管理する国内の乳幼児支援センターで働くスタッフを中心に、使い捨てプラスチック削減を訴える啓発講座した。“隠された仮説”とは、野田（2017）によると開発協力プロジェクトにおいて、活動計画の前提に存在する、認識されない仮説のことであり、本章において当該プロジェクトの経過を検証した結果、少なくとも以下3つの隠された仮説の存在が考えられる。

- ・人々は環境破壊の現状や環境保全の重要性について知らないはずだ
- ・使い捨てプラスチックの具体的なイメージは共通である
- ・使い捨てプラスチック製品を使わなくても、参加者は普段の生活で困る場面はない

第5章では、住民の生活場面から隠された仮説を認識可能な状態にすることができるか、それぞれの仮説について、筆者が生活者視点で把握した情報から分析を行なっている。その結果、住民が環境破壊の現状や環境保全の重要性を知る機会は少ないとは言えず、実際に行動を起こしている住民も存在することが明らかとなった。また、分別収集が実施されていないなかで、ごみの素材について認識する必要に迫られることはなく、素材の認識は不十分であったことも確認された。さらに3つ目の仮説については、経済状況と製品の価格設定からは、使い捨てプラスチック製品を選んでいるのではなく、選ばざるを得ないというのが適切な状況だと考えられた。

また、プロジェクトの経過には、生活者視点を用いることでプロジェクトの推進につながった場面が存在することも明らかにすることができた。

最後に、第6章では、開発途上国の住民は、リスクに対する備えが困難なことから、環境問題に対しても脆弱な状況であると言わざるを得ないが、環境問題は、生活課題の中に位置付けることが可能であり、それにより、環境保全と開発を二者択一ではなく、両立する可能性があると結論を示している。環境問題の解決のために、生活場面で何に取り組むかを伝える啓発活動に対し、生活課題の解決のために、環境問題にどう取り組むかという考え方は、まさに開発であり、環境保全か開発かという二者択一ではないことを明らかにしており、生活者視点を持つソーシャルワーカーが、環境問題に取り組む意義の存在を確認した。なお、本研究では、生活場面における解決策を中心に分析や考察を進めたが、使い捨てプラスチック製品を生産する企業や販売事業者に対する働きかけについても、重要な課題としたい。